

## 一将 功成りて万骨枯る？ 佐々木崇夫『三流週刊誌編集部』

「アサヒ芸能と徳間康快の思い出」とサブタイトルされた本書は、新橋界隈の徳間書店や活版新聞／新光印刷を思い出させ懐かしい本だった。サブテーマの徳間康快社長（1921-2000年）は、戦後読売騒動から雑誌・新聞経営、さらに映画・アニメとのしががった立志伝中の人。角さんと親しく、その後は中曽根御大や東映岡田茂に兄事したメディア業界フィクサーの一人だった。（菊地実）

### 釣瓶落とし

元祖週刊誌『週刊朝日』は昨年101年で休刊。新聞・雑誌は「休刊」と言う名の廃刊や紙媒体発行中止というニュースが相次ぐ。紙需要を見ても新聞用紙は年10%減少。半世紀前本屋でバイトしている頃は『月刊文藝春秋』『週刊新潮』が飛ぶように売れた。昨今の紙媒体衰退は1960年代／劇映画人口減少、90年代／ケータイ・PC・ネット普及、今日のSNS時代とメディア主役交代をまざまざと見せつけてくれる。

<図表1> 主な週刊誌発行年

名称	出版社	発行年	備考
週刊朝日	朝日新聞	1922年	1922/2/25、旬刊→週刊
サンデー毎日	毎日新聞社	1922年	1922/4/2
週間読賣	読売新聞	1952年	旬刊→週刊
週刊サンケイ	産経新聞	1952年	
週刊新潮	新潮社	1956年	
週刊アサヒ芸能	徳間書店	1956年	タブロイドをB5判雑誌に※
週刊明星	集英社	1958年	
週刊平凡	平凡出版	1958年	
朝日ジャーナル	朝日新聞	1958年	
女性自身	光文社	1958年	
週刊文春	文藝春秋	1959年	
週刊現代	講談社	1959年	
少年マガジン	講談社	1959年	
少年サンデー	小学館	1959年	
週刊TVガイド	東京news通信社	1962年	
女性セブン	小学館	1963年	
平凡パンチ	平凡出版	1964年	
プレイボーイ	集英社	1966年	
少年ジャンプ	集英社	1968年	月2回刊→1969年週刊
週刊ポスト	小学館	1969年	
週刊宝石	光文社	1981年	
フォーカス	新潮社	1981年	写真週刊誌
FRIDAY	講談社	1984年	写真週刊誌

※1946年創刊の「アサヒ芸能新聞」（アサヒ芸能新聞社）をリニューアル  
<『雑誌で見る戦後史』（大月書店）他を元に作成>



### 戦後は週刊誌時代

B5版週刊誌は新聞社専売だったが、戦後の『週刊新潮』成功<sup>\*1</sup>で、続々と出版社系週刊誌が登場し、女性週刊誌、少年漫画週刊誌と多様化。出版の中心が書籍から雑誌に移るきっかけとなった。週刊朝日140万部、女性自身110万部、少年ジャンプ650万部と昭和の御代はマス週刊誌全盛時代だった。

私は出版社新入社員時代、先輩から「新聞社系週刊誌は新聞本紙の紙が余ったから作った」と言う話を聞いたが、これは都市伝説だろうか？戦後雨後の筈のようにカストリ雑誌が登場したものの、速報性が必要な週刊誌は新聞社専売だった。これを打破したのが『週刊新潮』で、以後大手出版社から続々と週刊誌が発刊された。新聞社週刊誌が日刊からの変身であるのに対して、出版社系の多くは月刊雑誌からのアプローチだった。時代

とともに細分化し、若者、女性、テレビ、写真週刊誌と拡大していく。〈図表1〉を見ると、先行平凡、後追い集英社の一人勝ちという気がしないでもない。さて『アサヒ芸能』はタブロイド映画紙から始まり、昭和36年B5雑誌化された。アサヒと名は付くが、天下の朝日新聞とは全く関係ない。

### 雑誌は生き物だ

著者佐々木氏が「無断でアサヒ芸能出版を受け最終面接に残ったことを・・・あのアサヒ芸能ですかと素っ頓狂な声を渡辺一夫教授\*2は上げ、さらに驚いたのは徳間社長を知っていることだった」(26頁)

1967(昭和42年)春の最終面接で会った徳間社長は、「恰幅がよく、魁偉とも形容できる容貌の人物だった・・・ダブルの背広に身を包んだ姿形には年齢以上の貫禄が備わっていた・・・失礼ながら知性は感じられなかった」\*3(28-9頁)

徳間社長は「君に定期刊行物の何が分かるんだ。生意気言うんじゃない・・・雑誌っていうのは生き物なんだ。編集長が種を蒔くが、どう育っていくかは読者が決めるんだ」(30-31頁)。

これ今だったら完全にパワハラと言われそうだが、昭和の中小オーナー企業ではよく見られた。私もある出版社役員面接で「こんな作品も知らないのか」と言われた。出

版社・映像プロダクション社長は独立精神旺盛・个性的お山の大将が多い。

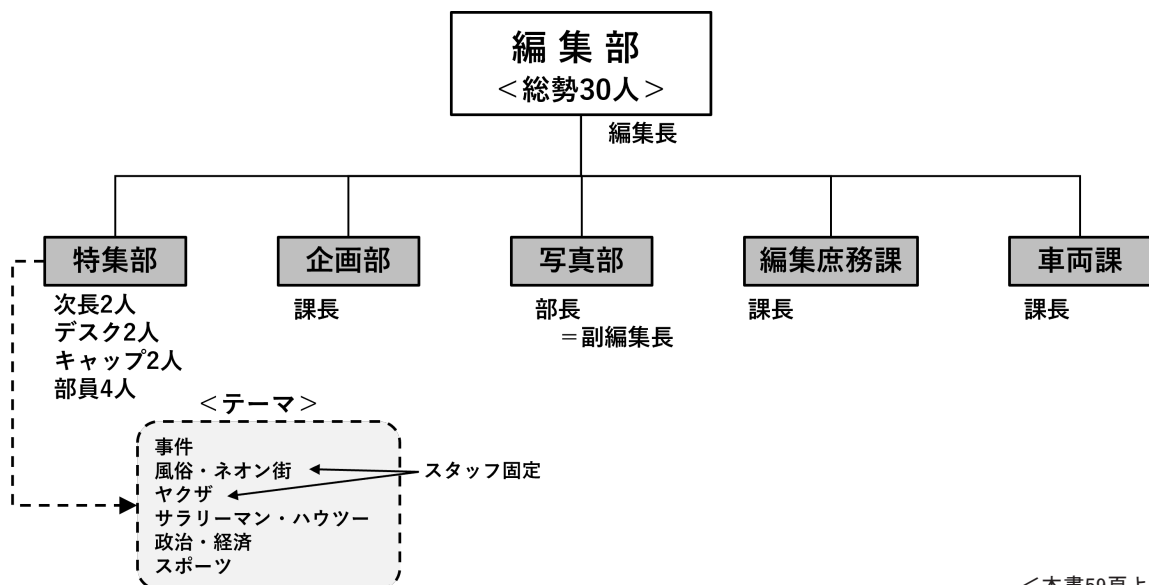
その年4月の入社式／「今年は五百人の受験者から・・・実に有意な人材を得た・・・名調子の世辞・・・徳間康快ほど弁舌爽やか話のうまいトップにお目にかかったことはない」(31頁)

### 販売部で不貞腐れ

佐々木氏は希望した編集部ではなく販売部に回され、「不貞腐れ気味」。新聞社同様出版社も花形出世コースは編集部で、販売広告は傍流だった\*4。新入社員旅行で殴り合いの喧嘩をした話は小心者の私には驚きとして、初任給は三万円。「大卒初任給相場は二万円弱、出版界は好景気で。講談社が三万円超、岩波書店は破格の四万円強だった」(35頁)。ビール大瓶120円、ラーメン70円、山手線初乗り20円と紹介。この辺は石油ショックで紙・油が高騰した昭和49(1974)年に出版社にやっと潜り込んだ私とはだいぶ違うが、当時でも東芝・松下・大銀行より初任給は高かった(その代わり、残業手当は無かった)。

当時の雑誌販売は「取次と鉄道弘済会と即売」。「出版業が極端にいうと机と紙があればできると言われる所以は、印刷・製本はもとより搬送、小売に至るまで他人まかせ・・・特に売上金まで集金してくれる取次の存在」(35

〈図表2〉『アサヒ芸能編集部』



〈本書59頁より作成〉

頁)と、製販分離の出版産業と印刷を含め、直営販売店を整備した新聞産業の違いがここにある。しかし、この利点は数十年して逆回転していく。

## 週刊誌編集部

80年代に大手出版社週刊誌編集部にお邪魔した時、フリースタッフを入れて百人以上と聞いた。当時のアサヒ芸能編集部は新聞社ミニ版で、比較的小人数<図表2>。情報産業論的にいうと、日刊新聞／週刊誌／月刊誌／単行本と、時間サイクルが人手を決める。<図表2>で注目すべきは特集テーマ。特に「風俗」「ヤクザ」が二大テーマ。ここが専任であるのは、人間関係で情報が集まるからである。事件ものアンカーは「女偏であれヤクザ偏であれ、競い合うような文体にこだわった・・・『週刊新潮』『週刊文春』に引けを取らなかった」(85頁)とし、溝口敦、飯干晃一(『山口組3代目』)ほか、著名ライターを紹介。しかし私は『週刊文春』が産んだ草柳大蔵、トップ屋元祖梶山季之、緻密な立花隆たちとの違いがあると感ずる。

取材に関するエピソードは豊富で、時代背景も含めすこぶる面白い。<ツッコミのアサ芸>と言われヤクザ、学生運動に強く、<ナンパ週刊誌の雄>として50万部を超えた。70年大阪万博でも、昼のパビリオン展示ではなくコンパニオン嬢たちの夜のご発展を取材する。

一方オーナーの徳間康快は、「さまざまなマスコミを起こして敗退し続け、不本意ながらアサヒ芸能新聞を引き受け・・・育て、会社を引っ張ってきたが、意外な成功から守りの姿勢に変節していったのではないか」(89-90頁要約)として、昭和三十四年の鉄道弘済会事件(販売停止処分)や昭和四十二年梶山季之『生贄』事件で、徳間は「電光石火」で鉾を納める\*5。

## 永のお別れ

平成元年佐々木氏は、月給百五十万円の「役員待遇副本部長」から月給八十五万円の子会社編集プロダクション役員に左遷。原因は新本社建設反対とコミック事業への逡巡だった。

平成六年、映像ホール主任を断り退社する佐々木氏に対して徳間社長は「キミは駄馬」と言った。その六年後、徳間社長は逝去した。

酒・女・喧嘩と、本書は戦中世代らしい反骨精神と事件エピソードが散りばめられ、時折文学書やジャズがリフレーンされ、仏文学徒らしさが滲み出ている。雑誌と単行本の違いの他、佐々木氏は私とちょうど一回り違いで、高度成長期の雰囲気は大きく異なる。メディアは成長期が面白い。

なを80年代末大手映画会社社長から紹介された私に対して、徳間社長はパーティで会うたびに「うちに来ないか」とお愛想で誘ってくれた。またダブルの背広から和服が多くなり、文化人らしくなっていた。

徳間社長がプロデュースした映画『敦煌』前売券を、広告代理店関係者から百数十枚買わされたことも今は懐かしい思い出になっている。

\*1: 松本清張原作映画『張り込み』(松竹・昭和三十二年・野村芳太郎監督)の冒頭、急行さつま号の中で刑事役宮口精二がチラリと週刊新潮を見せる。

\*2: 筆者佐々木氏は立教大学仏文科一期生。渡辺一夫、村松剛、辻邦夫と錚々たる教授陣がならぶ

\*3: 入社式のスピーチを「ホラ吹き男爵氏」と書いている。私もその数年後、何度もベンツに乗って出かける徳間社長を見かけた。

\*4: 私も新入社員時代、営業担当につられて名古屋関西に初出張したが、学ぶことが多かった。書籍と違って週刊誌はキオスク、即売店の営業力が強く鉄道弘済会はしばしば圧力をかけ、言論弾圧している。

\*5: 『インドネシア賠償事件』岸信介とK商社がスカルノ大統領に銀座ホステスを献上した。混同されたデビ夫人抗議で本回収、絶版となった、

■筆者/ 佐々木崇夫(ササキ・タカオ)1942年盛岡市生まれ。1967年立教大学文学部卒業。同年アサヒ芸能出版入社。アサヒ芸能編集部次長もテレビランド編集長、編集本部服本部長、1994退社、編集グループアクアロード主宰

■書誌/ バジリコ出版、2006年3月刊行、四六判、325頁